

乳児をもつ母親の育児行動をめぐるおむつ交換の意味 ～エスノグラフィーによる分析を試みて～

松井弘美¹⁾ 永山くに子²⁾

1) 富山赤十字看護専門学校

2) 富山医科薬科大学医学部看護学科

要 旨

本研究は乳児をもつ母親の産後1カ月までのおむつ交換に関する育児行動をめぐるおむつ交換の意味を検討することを目的とし、Ethnographyの手法を用いた帰納法的・因子探索研究である。対象を乳児をもつ母親とし以下のことが明らかになったのでここに報告する。

- 1 おむつ交換に関する育児行動として共通する内容として、『授乳の前におむつ交換』『泣いたらおむつを替える』『おむつ交換は五感で判断』という3点が認められた。
- 2 育児行動のパターンを分類すると、育児書を手本にする『観念型』と、児と相互作用しながら育児を行う『相互作用型』に大別できた。『相互作用型』はさらに『五感で感じる自然体型』『解釈型』『試行錯誤型』『反応を読み取ろうとする型』に分類できた。

キーワード

育児行動 おむつ交換

1. 緒言

育児は家庭がもつ機能の中でも重要であり、子どもの両親が第一義的な責任を持つことから、個人レベルで捉えていくことが必要と考えられる。しかし、日本における育児の問題は、家族内における地位や関係性、役割分担と関連している。総務庁統計局の「社会生活基本調査」による男女別の家事・育児に費やす平均時間を見ると、男性は13分、女性は有業者で3時間51分、無業者で6時間39分であり、女性は職業の有無に関わらず、男性に比べ家事・育児にかなりの時間を割いていることがわかる。このことより心身ともにまだまだ育児の負担が母親に集中していることは否めない¹⁾²⁾³⁾⁴⁾。

さらに、母親自身も少子化の時代に育っており、自分が育児をするまで、子どもの世話をした経験が殆どないといった状況が続いている。臨床においても、出産するまで、子どもを抱いたり、おむつを替えたりなど全く育児を経験したことがない産婦が、子どもに対しどうしたらよいのか戸惑っている場面に出会うことがある。一方で育児に関する雑誌が多く出版されており、妊婦検診で訪れる母親が育児雑誌を読んでいる姿はよく見られる。しかし、子どもは一人一人個別性があり、実際の育児は育児書通りにはいかないことが多い。育児に関する情報はあるもののそれをどのように判断し、選択し、行動していけばよいのかわからない状況であるといえる⁵⁾。このような状況に対しては、知識や情報を提供するだけでなく、一人

一人の母親に対し、個別的で具体的な関わりが必要となる。以上のことより、母親に育児に必要な知識や技術を指導するだけでなく、育児を実践する母親に寄り添い、母親自身が自己の生活の中で意思決定し、統御していく能力が重要であるといえる。

育児行動の一つであるおむつは、その歴史は古く、国によっても方法は異なり、それぞれの国の歴史や文化の影響を受けている^{6) 7) 8)}。紙おむつが主流となっている現代ではおむつにかかる負担は軽減されていると考えられる。しかし、男女共同参画社会という視点から、父親も育児に参加することが必要とされ、父親の育児行動の実態が報告されているのをみると、抱く、あやす、子どもとの遊び、入浴の世話が多く、おむつ交換については家事に次いで低く、父親は他の育児行動に比べ、おむつ交換をしないということがいえる。また妻が夫とともに聞きたい内容として、おむつ交換が多いという結果から、母親はおむつ交換に対し、負担を感じていると考えられる。

つまり、おむつは日本の文化や時代の価値が影響していることや、おむつ交換は、素材・形態の変化があるというものの、母親にとっては育児の中でもかなり負担となっている行為と考えられ、それを実体験している母親から捉えることは重要であるといえる。さらにおむつ交換は、乳幼児の尿・便の排泄回数が多く一日に何度も行われる育児行動であるが、単に汚れを取り除くということだけでなく、子どもが快・不快を感じ、排泄習慣を身につけるといった目的があり、このためには子どもの状況を捉え、いつどのようにおむつ交換するかを考えて対処していくことが必要となる。したがって母親がおむつ交換を通して子どもの反応をどのように読み取り、子どもに応えているかを知り、ひいてはおむつ交換が母子の関係性においても重要であると考えられる。母親のセルフケア能力を最大に引き出し、育児が自立して行なえるよう、日々何気なく、儀式化されたおむつ交換について、もっと科学的にみていく必要がある。

そこで今回乳児をもつ母親の産後1か月までのおむつ交換に関する育児行動の過程を、Ethnography⁹⁾の方法を用いてその実態を捉え、育児行動をめぐ

るおむつ交換の意味について検討したのでここに報告する。

2. 研究方法

1) 対象者：T県内のT病院の産科にて出産をした初産で、乳児を持つ母親5名

2) 調査期間 平成15年9月下旬～12月上旬

3) データ収集方法

参加観察及び、半構成的面接法で行なった。

観察の時期は、育児指導の開始の時期及び産後の母親の疲労を考慮し、入院中はおむつ指導が行なわれてから、1日おきとし、その後は1週間毎に4週目まで縦断的に行なった。

観察の時間は1ウルトラディアンリズム*を1単位として行なった。観察内容は、母親と新生児の相互作用及び、母親の新生児に対するおむつ交換の一連の過程とした。

研究対象者1名に対する面接の所要時間は約30分から1時間を目安とした。面接時期は一連の観察が終了した時点とするが、母親の疲労状況を確認し行なった。面接の場所は入院中は褥室またはダイニングルームで、できるだけ母親のリラックスできる場所を選んだ。退院後は訪問時に通された自宅もしくは実家の部屋で行なった。面接内容は研究者が独自に作成したインタビューガイドをもとに半構成的に行なった。

質問は、会話の流れや母親の理解に合わせて行なった。面接内容は対象者の了解のもとに録音し、録音内容は逐語的に記録しデータとした。面接は、会話の流れや母親の理解に合わせて行なった。参加観察において得たデータは補助データとした。

4) 倫理的配慮

倫理的配慮として、研究の目的・方法・研究参加拒否の権利を文書で示し、説明をした。対象者の同意を得た上で観察・面接を行なった。面接内容は秘密厳守を説明し、了解を得た上で録音した。得られたデータは厳重に保管し研究終了後内容を消去した。観察・面接により得られたデータは個人の特長ができないよう匿名性を保持し、プライバシーの保護に配慮した。

5) データの分析方法

フィールドノート及び面接内容の記録をもとに、カード化した単文の内容検討を継続的に分析した。内容の分析はEthnographyによる方法で、コード化、パターン分類の順で検討した。質的研究は研究者の主観が入りやすく、信頼性・妥当性に影響することから、全ての過程において専門家によるスーパーバイズを受けた。

※サーカディアン・リズムよりも短い周期を持つ生物リズム

3. 結果

1) 対象の属性

本研究の対象者は表1に示すように、初産5名。年齢は17歳から36歳。職業は専業主婦が1名、仕事を有する者が4名であった。家族形態は核家族4名及び複合家族〔実の両親と同居〕1名。出産様式は帝王切開2名、経膣分娩3名。新生児の性別では男児2名、女児3名であった。主な育児協力者については全員実母であり、夫の育児に対する協力は得られていなかった。その理由は研究期間が産後1カ月までであり、複合家族以外全員里帰りであったことによると考えられた。育児技術の経験に関しては、2名が姉妹の子どもの育児に参加した経験を持っていたが、3名は育児技術の経験は全くなかった。

使用していたおむつの種類は、入院中、全員紙おむつを使用していた。退院後に紙おむつを使用していた者が4名、布おむつと紙おむつの併用が1名、それは専業主婦であった。紙おむつを使用している者が殆どであり、布おむつ使用については、経済的なことを考え、実母から勧められてい

たという状況であり、母親自身は積極的に布おむつを使用してはいなかった。

2) 育児行動のコード化

参加観察及び半構成的面接により得られたデータを記述し、単文化した356枚のカードをコード化すると、表2に示すように共通の内容と母親により異なる内容が明らかになった。

対象者は全員初産ではあるが、新生児の性別や育児技術の経験の有無、退院後の生活状況は様々であり、その影響により、おむつ交換に関する育児行動の内容は異なっていたが、以下に示す3点の共通する育児行動が認められた。

(1) 授乳の前後におむつ交換

母親は授乳の前後でおむつ交換をしていた。入院中は「授乳の後はおむつを見る」「指導で言われた通り授乳前におむつを見る」というように決められた一連の行動として行っていた。しかし退院後は「先におむつを替えたほうがおっぱいを飲んでそのまま寝ていく」「飲む量が多くなったのでおっぱいの前におむつを見ると毎回うんちかおしっこをしている」「紙おむつだとおっぱいの前後におむつを替えている」というように、子どもの授乳や睡眠状況、排泄状況を考慮した上で授乳前後におむつ交換をしていた。

(2) 泣いたらおむつを替える

子どもが泣くことを一つの目安にしておむつ交換をおこなっていた。「おっぱいの前にすぐ泣いているのでおむつが汚れているかもしれないのでかえる。」「おっぱいの後でも泣いたら必ずおむつを見る」「泣いたらおしっこだと思うので何度も泣く度におむつをみている」

表1 対象の属性

N=5

事例	年齢	居住地域	職業	家族形態	出産様式	児の性別	育児協力者	夫の協力の有無	育児技術の経験の有無	使用おむつの種類	
										入院中	退院後
A	33	都市部	会社員	核家族	帝王切開	女	実母	無	有※	紙おむつ	紙おむつ
B	32	郡部	会社員	核家族	帝王切開	男	実母	無	有※	紙おむつ	紙おむつ
C	17	都市部	専業主婦	核家族	経膣分娩	女	実母	無	無	紙おむつ	布・紙おむつ
D	24	郡部	会社員	複合家族	経膣分娩	男	実母	無	無	紙おむつ	紙おむつ
E	36	郡部	会社員	核家族	経膣分娩	女	実母	無	無	紙おむつ	紙おむつ

※ 妹の子の育児に参加

表2 おむつ交換に関する育児行動の内容

N=356

事例	コード化	
	共通の内容	異なる内容
A	泣く 授乳との関係 音	うんちを替えたら即手洗い 汚れはお風呂できれいに 育児書と比較する 尿漏れが気になる 戸惑うとわからない
B	泣く 授乳との関係 音 臭い	男の子はおしっこを飛ばす 尿漏れが気になる おしりはサーッと拭く お母さんのオムツに関する決まりごと 昼夜の傾向がわかる
C	泣く 授乳との関係 音 臭い	まず見本をみる 拭くことにこだわらない 合理性・経済性 子どもの反応を読み取ろうとする
D	泣く 授乳との関係 音 臭い	手技にこだわる 汚れはお風呂できれいに 男の子なのでわからない しぐさをみる
E	泣く 授乳との関係 音 臭い 手の感触	手技へのこだわり おむつの情報に対する戸惑い しぐさ、ぐずりをみる

「泣いたらおっぱいかおむつだと思う。そのうちおしっこやうんちをしているのはその半分くらいかな」というように子どもが泣くのは授乳かおむつの汚れと捉えていた。この状況は入院中から産後1カ月まで経時的には変わらなかった。

(3) おむつ交換は五感で判断

入院中は「ブリブリッと音を出した時はうんちをしていると思う」「おっぱいの途中でも音がしたらおむつを換える」というようにおむつ交換のきっかけは五感で捉えた情報をもとにしていた。「おむつを換えるタイミングは音が鳴るのでわかる」というように、主に排ガスの音を聞いておむつを換えていた。産後2・3週間目では、「うんちであれば臭いでわかるので、臭いがしたらおむつを換える」「今は臭いを目安にしている。うんちの臭いがとてもくさくなった」「うんちは音と臭いを目安にしている」「おしりにブブツという感触が伝わったら見るようにしている」というように、便については音だけでなく臭いや感触も合わせておむつ交換をする判断の基準としていた。

また、産後3・4週間目では、「最近はいきんでいるというしぐさがあって手はしっかり握っている」「いきんでいる時は顔が赤い」「様子を見ていると顔をしかめたり、全身に力をいれているのでいきんでいるのだと思う」「うんちを出し切った後の表情がある」というように、子どものしぐさを観察して判断していた。

尿についての判断は便に比べあまり聞かれなかったが、産後4週間目になると、「尿漏れが気になり、夜は寝ていても触って確認する」ということであった。

3) 育児行動のパターン分類

これらのおむつ交換に関する育児行動を分析した結果、育児書を手本にするいわゆる『観念型』と、児と相互作用しながら育児を行う『相互作用型』に区別された。以下に説明する。

(1) 育児書を手本に考える母親—『観念型』

良く育児書を読んでおり、「育児書にはこう書いてあったけれどどうなんですか」という質問をよく受けた。それは児の状況を照らし合わせて聞くのではなく育児書の内容についての確認であっ

た。「陰部は汚れているので拭かなければならない」「汚れはお風呂できれいにする」というように観念が強く感じられた。女兒のおむつの当て方や便の性状の確認においては必ず「女の子だからかもしれないけど」というように、母親の女兒に対する観念があった。一方「便をしている状態が分からない」「便の性状が分からない」「女兒の陰部の拭き方が分からない」と、微妙な変化や複雑な状況について戸惑いを表出していた。戸惑うことについては、そのままの状況で様子を見ていた。

いわゆる『観念型』の育児行動パターンでは【育児書が手本→児の反応をあまりみない→育児書と照らし合わせて解釈する。しかし戸惑うことはそのままにしておく】という過程を体験していた。

(2) 児と相互作用しながら育児をする『相互作用型』

相互作用型パターンでは4事例から、『五感で感じる自然体型』『解釈型』『反応の意味を読み取ろうとする型』『試行錯誤型』に分類できた。

①五感で感じる母親—『五感で感じる自然体型』

児の状況の観察からすべての行動が始まっていた。「ブー」と音がしたりぐずったりしたら便かおしっこだと思う」「臭いがしてぐずるときはおむつを替える」「おむつの濡れ具合を先に見て確認する」「おちんちんの先が少し立っていればおしっこが出る証拠」というように五感を使って観察していた。また「おむつの枚数で漏れが違う」「夜にためておしっこをする」というように児の日々の変化を良く捉えている言葉が聞かれた。少しの変化も見逃さないようにみていた。そして、おしっこが飛ばないように工夫をしてその効果をまた観察していた。また尿の量の変化や、排ガスと排便のタイミングなど、児の日々の変化を良く捉え、又児の状況に応じて工夫した行動をとっていた。子どもの反応を見て聴いて触れて、自然とそれを捉え母親自身が反応していた。そうして変化させていくことを楽しんでいるという印象さえあった。

ここでのパターンは【驚き→観察する→経日的変化を捉える→工夫する→観察を深める→判

断する】過程であり、『五感で感じる自然体型』であった。

②子どもの反応を見ながら解釈する母親—『解釈型』

何もかもが分からない状況から育児が始まった。おっぱいはいつ飲ませたらよいか、いつ飲み終えるのか、飲んだら次に何をすればよいか。一つ一つの行動がわからないので、言われたことをその通りにする。分からないことは見るという行動から始まった。「言われた通りにしたんですけど…これでよいですか」「一度見てからしたんですけど…これでよいですか」という言葉が聞かれた。何度かこの遣り取りを繰り返すうちに「うんちの色が変わったのはおかしい」「陰部の汚れは取れていないが、皮膚が赤くなっていないのでこのまま様子を見る」という言葉が聞かれた。退院後は、「お尻はきれいなのでこのままでよい」「うんちは形も色もずっと同じなのでこの状態が良いと思う」「うんちの量が多くなってきているのでお尻はきれいに拭く」というように、子どもの反応を見ながら、これで良いのかを自分で解釈していた。全く何もわからない状況から始まった育児であったが、この行動の繰り返しにより、一つ一つの育児行動を学習していた。

つまり、『解釈型』の育児行動は【まず手本を見る→やってみる→反応を見る→これでよいか確認する→やってみるという流れの中で、行なった結果を解釈し、判断する】という過程であった。

③分からないけどいろいろやってみる母親—『試行錯誤型』

「何がわからないかもわかりません」という言葉から育児が始まった。わからないことをそのままにはおけず、毎日メモに記録してあり、訪室するとメモを見ながら確認をしていた。「助産師さんは色々にいわれるけれど、どれが一番よいんでしょうか」「一つ一つが新しいことで全くわからないけれど、どうなんですか。こうしてるんですけど」というように半信半疑ながら、実行していた。「泣いてしまって

からおむつを見ると機嫌が悪い。泣いている時はやっぱりお腹が空いているのでおっぱいだと思う」「機嫌の良いときに見てみるとあまりおしっこもうんちもしていない。やっぱり泣いた時にしていると思う」というように自分の行った方法でよいのか判断するため、児の状況はよく観察していた。その結果、一つ一つのことを確認することで、自分の方法を確立していた。

ここでの育児行動は【分からない→半信半疑で行なう→結果の確認→これでよい】であり『試行錯誤型』の育児行動パターンと命名した。

④児の反応を読み取ろうとする母親－『反応を読み取ろうとする型』

とても児の状況が心配で、泣き声、足の動き、髪の毛の硬さなど、あらゆる児の状況について大丈夫なのか質問を受けた。児の状況についてはとてもよく観察していた。「彼は、泣いていてもおむつのときだとおしりを微妙に動かしている」「うんちを出すまでは本当にぐずぐず言っている。気持ち悪いんだと思う。彼には気持ち悪いっていうのがあるみたい」「彼はうんちを出した後はホーッと口をすぼめるの、だからよく顔を見ている」というように、児の反応の一つ一つに意味を見出さるまで児と会話しているかのように語ってくれた。また「音がして急に口を閉じたのでいきんでいるのではないか」「おっぱいの前、途中で顔をしかめ赤くなっている時必ず音を出す」というように児の反応を、音としぐさというように複合的に捉えていた。

この育児行動は【児の反応をよく見る→反応を複合して捉える→意味を読み取る】であり、『児の反応を読み取ろうとする型』の育児行動であった。

4. 考察

前述の結果に基づき、乳児をもつ母親の育児行動をめぐるおむつ交換の意味について以下の

- 1) 母親の情報キャッチとおむつ交換
- 2) 育児行動パターンの視点で考察する。

1) 母親の情報キャッチとおむつ交換

(1) 授乳前のおむつ交換

育児行動の特徴として、大方授乳の前におむつを交換していた。富山県内の公的病院5カ所で、おむつ指導の内容を確認した。施設ではおむつは授乳前に交換するよう指導をおこなっており、1カ所は授乳の前後におむつ交換するように指導していた。育児技術に関する指導書においても、授乳前後と明記されており⁹⁾、このことより母親は病院の指導通りに行動していたといえた。これは先述した堀井¹⁰⁾らの先行研究結果の、泣き方よりも、授乳時間との関係で行っていることと一致した。しかし、「母乳を沢山飲んで欲しいから、授乳前に泣いていると、先に飲ませてしまう。」「おっぱいを飲んでからおむつを換えると目が覚めてしまうので先に換える」というような、児の状況に応じて方法を変えていた。つまり母親の「おむつよりは、おっぱいを優先」という言葉にも表現されるように産後1ヶ月までは、おむつ交換よりも母乳栄養を確立させる授乳が、母親の育児行動として優先していることが確認できた。

(2) 『泣き』はおむつ交換のきっかけ

母親は、「泣いたら、おむつが汚れている」と捉えていた。また子どもが「泣く」とおむつが汚れているのではないかと確認する行動を繰り返していたが、その割には排泄していない状況にあった。この状況は入院中から産後1カ月の期間で変化はなかった。実際母親からも「泣き方の違いがわからないので、どんなことが原因で泣いているのかわからない」という言葉が聞かれた。先行研究でもおむつが濡れた時の泣き方を判別できた時期についてはかなり幅があった¹⁰⁾。また産後3・4週目に入ると、泣くという表現とは別に児の『ぐずり』という状況に対し、どのように判断してよいのかわからないという声がきかれた。これは生後3週頃になると、今までの新生児のCryingのパターンが変わる時期であり、ぐずり泣き(fussing)を含むクライングの量が増加し、母親が新生児のクライングで悩む原因にあげられていることと一致していた¹¹⁾。

このことは、「子どもが泣く」という状況は、週数を経ることで『泣き(crying)』の状況も変化するため、泣く意味を適切に判断できているわけではないが、おむつ交換をしようと行動を起こすきっかけになっているといえた。

(3) 五感を活用して観察し、状況を判断する

母親は五感で子どもの排泄の有無、特に便の排泄の判断を行っていた。入院中は排ガスの音という聴覚を活用して判断していたが、退院した2週目からは、便の臭いや、排泄時に手に伝わる振動など、聴覚だけでなく嗅覚・触覚も加わっていた。さらに3・4週目になると、顔の表情、手や足の状態など、子どもの全身を観察し、固有のしぐさを捉えていた。

入院中、母子同室ということもあり、母親は子どもの顔をよく覗き込むように見ているが、排泄の状況を判断できないことから、子どもの排便状況を捉えるのには音という聴覚が一番先となっていた。次いで、便臭という嗅覚で捉えていたのが2週目からであった。新生児の便の変化、即ち入院中は臭いが比較的少ない胎便や移行便であり、退院後からは便臭が強くなる乳便になることから、嗅覚による判断が退院後から多くなっていることが理解できた。

産後3・4週目頃になると、それまで子どもの表現する音・臭い・振動など一つ一つの現象として捉えていたことが統合され、さらに全身のしぐさという身体の動きという観察内容も加わり意味のある内容として理解するようになっていた。

Wolf¹¹⁾は、新生児期の覚醒状態の変化を捉えており、生後1週間では、身体活動が不活発な覚醒状態が多いが、生後3・4週間目からは視覚活動や、身体活動が活発な覚醒状態が増えるという報告があった。さらに腸と膀胱の膨張を不快刺激として取り上げ、覚醒状態との関係を検討していた。その結果、排便や排尿は児の覚醒状況を生じさせることにはならないと報告していた。以上のことから、生後1・2週間は児の排尿・排便の状況を「児の状況を観る」ということから捉えにくいといえ、捉えやすい音や臭いというものがおむつ交換を行う時期の判断基準となっているとい

えた。しかし生後3・4週頃になると、新生児の覚醒状況も異なり、身体の活動も活発になることから、身体の動きをよく観察し、判断の目安としていることがわかった。このようにみると母親は新生児の成長発達の段階に応じた視点から新生児の状況を観察していると考えられた。

2) 様々な育児行動パターンの存在

育児行動のパターンとして、表3に示すように五感で感じる「自然体型」、「観念型」、「解釈型」、「反応の意味を読み取ろうとする型」、「試行錯誤型」に分けられた。これをさらに大別すると、『児との相互作用しながら育児をする型』と『育児書を手本に育児をする型』に区分された。

『児との相互作用しながら育児をする型』には、相互作用のレベルがあった。事例Bでは児が反応することに気づき、それを中心に日々観察しながら育児を行っていた。事例C・Eは児の反応を観察し、その結果から解釈して自己の育児を行っていた。

事例Dでは、産後3・4週目になると、捉えた子どもの状況から、子どもの感情を推測しながら、おむつ交換を行っていた。これは『親と子の関係性の発達モデル』¹²⁾によるステージ3すなわち、親は子どもの反応に意味を読み取ろうとする時期に一致する。しかし、子どもの反応が不確かなこともあり、親自身の心の様子が投影され肯定的と否定的な間を揺れると言われる。この時期を過ごすことで、今まで一方的な関わりであったのが、相互に交流するパートナーであることを感じていくのである。実際母親の言葉からも「彼の場合は…みたい」「こんなに小さくても…なんですね」というように、一人の個別の人間としてみている表現がきかれた。このステージ3の段階を経て、ステージ4・5で互いに喜びとなるような相互作用が積み重ねられていくといわれている。またこの過程は、ステージ0・1・2というわが子を生きている存在、反応する存在に気づくことを経て至る。その時間的経過は、それぞれの親子により様々な進行していった。

またおむつ交換の予測ならびに読み取りやすさは、母親の育児有能感や育児への自信につながる

表3 おむつ交換に関する育児行動のパターン

事例	育児行動	育児行動のパターン	
		サブカテゴリー	カテゴリー
A	児の反応をあまり見ない ↓ 自己の観念・育児書と照らし合わせようとする ↓ 戸惑うことはそのままにする	『観念型』 子どもの状況を育児書に照らし合わせながら解釈している自分の観念がある	育児書を手本にする『観念型』
B	観察する→経日的変化を捉える ↓ 五感で観察を深める ↓ 判断する	『五感で感じる自然体型』生き生きと楽しんで子どもの反応を見ながら、自然とそれを捉えている五感で捉えている	児と相互作用しながら育児を行う『相互作用型』
C	まず手本を見る ↓ やってみる ↓ 反応見る ↓ 結果を解釈する	『解釈型』子どもの状況を反応を解釈しながら育児をしている	
D	児の反応をよく見る ↓ 反応を複合して捉える ↓ 意味を読みとる	『反応の意味を読み取ろうとする型』子どもの反応を十分に捉え、その意味を読み取ろうとする	
E	分からない ↓ 半信半疑で行なう ↓ 結果の確認 ↓ これでいこう	『試行錯誤型』自分で行っていることを確認しながら自立していく	

といわれることから、母親が新生児と、どのような関係を築いている段階なのかを理解し、関与することが大切であるといえた。

育児書を中心に育児をするタイプでは、育児書の内容を基準として行動しており、児の反応を捉えた言葉が殆ど聞かれなかった。そのため、児の状況に戸惑い、どうすればよいかわからないという言葉が多く聞かれた。これは育児書の内容が手本となるので、そこに書いてない具体的なことに対しては、手本となるものがなく、どのように対処すればよいのかが判断できない状況にあると考えられた。

したがって、このような育児行動のタイプの母親に対しては、児と向き合うことの大切さ、具体的に児の反応を捉えていくことを入院中より行っていくことが必要であるといえた。クラウド¹³⁾が、

初めての親は子どもに対する準備も経験もない状態から、新しい課題を引き受けている。入院中は子どもを知る時間がなく、帰宅後はどのように取り扱ってよいかわからない状態にあると述べていることから、育児に対する知識や技術を指導する前に、入院中から母親が自分の子と接触する機会を通し、子どもを観る、知ることが重要であるといえる。

結語

今回新生児を持つ母親の育児行動の中でも負担が多きいと考えられるおむつ交換に焦点をおき、育児行動の分析を行った。母親が日常繰り返される育児行動の中でどのような体験をしているのか、その実態を理解する必要があると考え質的研究であり、研究者がフィールドに入り対象の側からそ

の体験を理解する Ethnography の手法を用いて行った。母親の日常の経験を捉えることで、助産師として、臨床で母親に接していた時には気付かなかった母親達の生き生きとした児との相互作用や児の状況を捉える観察力を肌で感じることができた。母親達の発する言葉を捉え、どのような体験をしているのか、対象を捉えることから多くの学びがあり、看護は対象を知ること、対象から学ぶことから始まると改めて感じることができた。そして、一人の女性が母親としての新たな役割を担い、子どもと向き合い育児をしていくスタート地点に関わり、育児の自立を支えていく専門職として何気ない儀式化された日常の育児行動を見直し、最善のエビデンスを持って看護を提供することが必要であるといえる。

さらに、日常あまりにも当たり前に行われているおむつ交換という一つの育児行動においても、文化や時代の変遷があり、そういった視点から育児を見直すことで、母親の育児行動のプロセスの一端を理解することができたといえる。

謝 辞

本研究を行うにあたり、快く研究に協力して下さったT病院の看護部長、産科病棟師長、産科病棟スタッフ、訪問時に忙しい中ご協力いただいた6名のお母様と赤ちゃん、ならびに御家族の皆様に心より感謝致します。

研究に際して小児看護学の広瀬幸美教授に適切な助言を頂いたことを深く感謝いたします。

なお、本論文は平成15年度富山医科薬科大学医学研究科看護学専攻の修士論文の一部に加筆・訂正を行ったものである。また第45回日本母性衛生学会学術集会にて本研究の一部を発表した。

引用文献

- 1) 日本婦人団体連合会：女性白書2001 ほるぷ出版 2001
- 2) 富山県：男女共同社会に関する意識調査1999
- 3) 目黒依子：講座社会学2 家族 東京大学出版会 p89-113 1999
- 4) ぎょうせい：平成10年度版 厚生白書 p82-93 1998
- 5) 馬居政幸：育児不安とは何か～家族社会学の立場から ころの科学 No.103 p16-28 2002
- 6) 禮式部：古事類苑 吉川弘文館 1998
- 7) 平凡社：大百科事典 1974
- 8) 家庭総合研究会：昭和・平成家庭史 川出書房新社 2001
- 9) J.M.Roper 他：麻原きよみ他訳：エスノグラフィー 日本看護協会出版会 2003
- 10) 堀井満恵：母親が児の泣き方を判別する能力獲得に関する要因の検討 富山医科薬科大学看護学会誌 4.2.p33-41 2002
- 11) 大藪 泰：新生児心理学 川島書店p8-10 1992
- 12) 橋本洋子他：カンガルーケア メデイカ出版 p 11-13 1999
- 13) M.H.Klaus：竹内徹 親と子のきずなはどうつくられるか 医学書院 p130-136 1998

The behavior of mothers' changing diapers in the mothering that is done in a month after childbirth. According to the inductive method of Ethnography,

Hiromi MATSUI¹, Kuniko NAGAYAMA²

1 Toyama Red Cross Nurses' School

2 School of Nursing, Toyama Medical and Pharmaceutical University

Abstract

The purpose of our study is to analyze the meaning of mothers' changing diapers in the mothering that is done in a month after childbirth. According to the inductive method of Ethnography, we tried researching factors.

We could summarize the results in the following:

1. There are 3 common possibilities in changing diapers.

(1) Mothers change diapers before suckling a baby.

(2) Mothers change diapers when babies begin crying.

(3) Mothers change diapers by their decision – It means they decide the time while their taking care of their baby.

2. We classified the mothering into 2 types. One is "Instruction Type".

The other is "Interaction Type". Further, "Interaction Type" can be classified into 4 types.

We named those "Instinctively Type". "Translate Type". "Trial Type". And "Interpret Type".

Key words

Mothering, diaper